

活版印刷の現状と問題点

09I4089 山本捺津美

1. 印刷の歴史

- (1) グーテンベルグ印刷機
- (2) 日本の活版印刷
- (3) オフセット印刷
- (4) 写真植字
- (5) DTP

3. 活版印刷の実際

3.1 活版印刷の工程

- (1) 活字の母型製作
- (2) 活字の鋳造
- (3) 文選
- (4) 植字
- (5) 紙型
- (6) 鉛版
- (7) 印刷



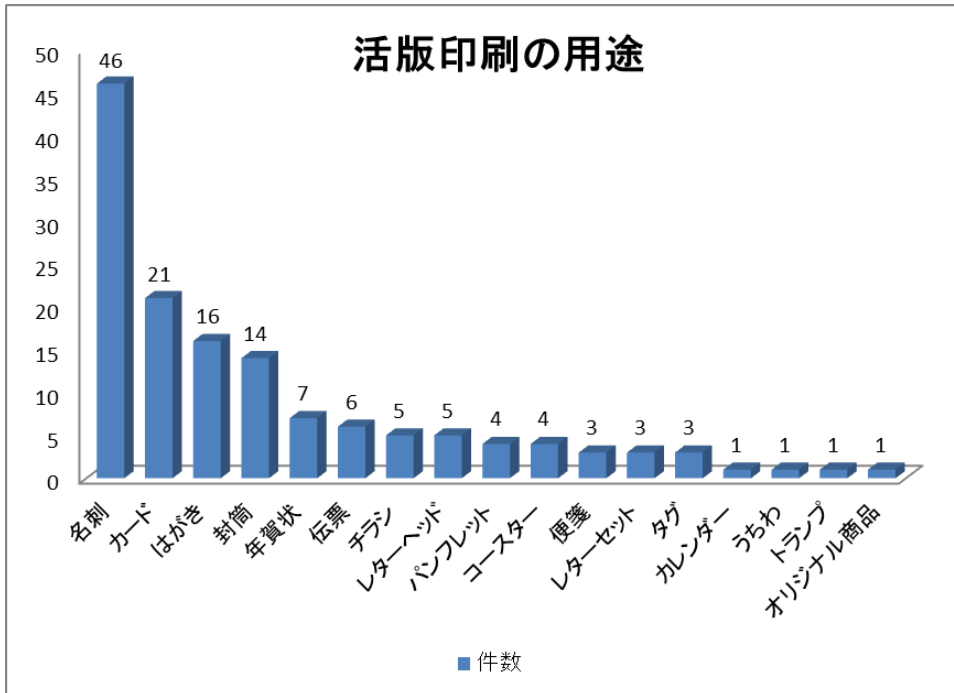
3.2 現場の調査

名古屋活版地金精錬所を訪問し、活字鋳造の現場や母型製作の機械などを拝見した。また YouTube の「活版印刷を追い！SEBASTIAN X 永原真夏が体当たり」から、有限会社 弘陽での活版印刷の実際の様子を見た。

4. 活版印刷の現状調査

ウェブで活版印刷所の調査を行った。一度にやると見つけにくいので、都道府県ごとに「活版印刷」のキーワードで検索した。社名に「活版」とあっても、実際にはすでに活版印刷を行っていない会社もあるので、実際にホームページで確認したところ、80 社が見つかった。

各社ホームページに記載されている活版印刷の用途を図に示した。活版印刷の用途で最も多かったのは、46 件で名刺だった。



5. 活版印刷の現状のまとめ

活版印刷の用途は名刺・招待状など特殊なものに限られている。しかも活字を用いる「活字印刷」はほとんど行なわれておらず、金属版・樹脂版印刷が主流となっている。現在活字印刷は「伝統技能」となっているとわがざるを得ないが、保存のための組織的取り組みはない。

5. 考察

名古屋活版地金精錬所の鈴木宗夫さんは、「凹凸や微妙な濃淡の温かみのある風合いや文字のバランス、長期保存ができるのが活版印刷の魅力というが、こだわりのあるデザイナーからの発注や記念に残る結婚式の招待状といった限られた需要しかなくなった。毎月のように取引先が高齢化や後継者不足で店を閉める。」と言っている。

経験を経てきた世代の人々が第一線を退くということは、知識やノウハウの空洞化が始まるということである。活版印刷は人間の感覚が求められる部分が多い。そのため、長年の経験で培われたノウハウを伝えていくためにも、早い段階で次世代への伝承を進めていかなければならない。